

# 憂國

2006(平成18)年4月3日 DVD 完成試写<東宝試写室>



監督・原作・脚色・製作・美術＝三島由紀夫／製作＝藤井浩明／演出＝堂本正樹／撮影＝渡邊公夫／出演＝三島由紀夫／鶴岡淑子（東宝、ATG 配給／1965年日本映画／28分）

……「戦後60年」が総括され、憲法改正論議がタブーでなくなった今、40年前の『憂國』がDVDとして甦った。1936年の2・26事件を背景としたわずか28分のシンプルで美しい「ドラマ」は、三島由紀夫の心情を赤裸々に吐露したもの。賛否両論が分かれるのは当然だが、『男たちの大和／YAMATO』（05年）を観て涙したという今ドキの若者たちがこれをどう感じるのか、是非聞いてみたいと私は思うのだが……。

## あれから36年、そしてあれから40年

当時最も有名な作家の1人であった三島由紀夫が、陸上自衛隊東部方面総監部で割腹自殺したというニュースが突然流れてきたのは、私が司法試験の勉強に入っていた1970年11月25日のこと。『憂國』という短編小説はその名前は知っていても、学生運動をしている間はもちろん、その後司法試験の受験生活に入ってから読む機会はなかったうえ、当時三島由紀夫は右翼思想の持ち主というイメージが先行していたため、あまり好きな作家ではなく、五木寛之などの方がよほど好きだった。

その三島由紀夫の割腹自殺から今年36年。そしてまた私は知らなかったが、三島由紀夫が監督・脚色したうえ、自ら主演した28分のこの短編映画がつけられたのが1965年の4月であり、それが日本で上映されたのが1966年4月とのこと。それから40年を経た今、三島由紀夫の自殺以降封印されていたフィルム原版が発見され、今回DVDとして甦ったとのことだ。

これも「戦後60年」の1つの表れであり、また妻木木聡、竹内結子が主演した

三島由紀夫原作の『春の雪』（05年）が大ヒットしたおかげ……。

## 『トリスタンとイゾルデ』と日本の伝統美・様式美

この映画の登場人物は武山中尉（三島由紀夫）とその妻、麗子（鶴岡淑子）の2人だけだし、セリフは全くないものだが、バックにはリヒャルト・ワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』の曲が流れ、その曲とピッタリ合うようにスクリーン上の動きが進行していく。

このリヒャルト・ワーグナーはナチスドイツのヒトラーが最も愛した作曲家であり、『トリスタンとイゾルデ』はワーグナーの数ある代表作の中の1つ。ワーグナーのオペラは、「騎士道」が1つの重要な要素になっている。三島由紀夫が日本の「武士道」とこの「騎士道」をどのように比較・検討したのかは勉強していないのでよくわからないが、三島由紀夫もヒトラーと同じように、ワーグナーの楽劇を愛していたことはまちがいない。

したがって、軍人とその妻の「愛と死」を、日本の伝統美・様式美の中で描いた28分の作品の中で、このワーグナーの曲をどのように調和させているのかが1つの大きなポイント……。

## もっと焦点を当てて勉強したい「2・26事件」……

この映画の主人公は、「2・26事件」において、新婚だという理由で仲間の青年将校たちから決起を打ち明けられなかった武山中尉。決起した部隊はその予想に反して（?）、「反乱軍」と認定され、首謀者たちが処刑されることになったのは歴史上有名な物語だが、決起に参加しなかった武山中尉は皮肉なことに、その反乱部隊の鎮圧を命じられることに……。忠ならんとすれば友を裏切り、友を思えば賊軍になると悟った武山中尉は、自決の覚悟を……。そして夫の覚悟を知り、喜んで自分も一緒に死ぬと言うのが、妻の麗子。

「2・26事件」が勃発したのは1936（昭和11）年だが、翌1937（昭和12）年7月の蘆溝橋事件以降日中戦争は本格化し、泥沼化していったのだから、まさに「2・26事件」は、日本陸軍や国を憂える青年将校たちが大きな分岐点に立っていた時代の事件。

「戦後60年」という視点とともに、大正デモクラシーを終え、満州の利権をめぐる軍部の力が台頭しようとしていたあの時代と、あの「2・26事件」を、この映画を観る中で、もっと焦点を当てて勉強してみる必要があるのでは……？

## 『男たちの大和／YAMATO』で涙した若者たちの感想は？

目標100億円と言われていた『男たちの大和／YAMATO』（05年）は、興行収入数十億円を突破して絶好調だが、それは若者向けにつくった製作意図が若者たちに理解され、受け入れられたおかげ……？ 私たちの世代が観ればいろいろと不満な部分もあるが、それはそれとして多くの若者たちがあの映画を観て、涙を流したとすればそれは大きな意味のあること……。

そこで私が聞きたいのは、その若者たちがこの『憂國』を観てどう思うのか、ということ。三島由紀夫も知らず、「2・26事件」も知らないまま、この28分の短編映画を観るだけで、今ドキの若者は何をどう理解し、どのように感じるのだろうか……？ 関西学院大学の法科大学院における、昨年夏の「都市法」の集中講義では、私が示した選択テーマの1つであった「戦後60年」をあるグループが選択し、「東京裁判の正体」と「戦後60年 日本人は、あの戦争をわかっているか」と題する詳細な発表がなされたが、これを経験した私としては、今年夏の集中講義で、このDVDの上映会をやってみたいと思うのだが……。もっとも、それには当然強い反発もあるはずだから、あまり無理はしない方がいいのではないかという自制心も……。

## こんな愛のシーンはさすが……

この短編映画は三島由紀夫の「美学」を凝縮したものだが、そのテーマは新婚状態にある青年将校夫婦の「愛と死」の2つ。まず「愛」については、新婚夫婦の愛が、精神的なつながりと肉体的なつながりの両面から描かれる。セックス描写において話題を集める映画は、いつの時代でも次々と登場しているが、この映画もそういう意味ではその中の1つ……？ しかし、夫婦の精神的なつながりをここまで高めた作品は、多分三島文学だけ……？

## 切腹シーンの美学は……？

もう1つ「死」のテーマについては、三島由紀夫自身の数年後の割腹自殺の予行演習であるかのように、そのシーンは映像技術の限界まで挑んだ生々しいもの。自殺するだけならピストルの方がよほど楽なことは明らかなだが、武山中尉や三島由紀夫にしてみれば、日本の武士道の伝統にそった割腹自殺でなければ全く意味のないもの……？

『日本のいちばん長い日』（67年）における三船敏郎扮する阿南惟幾陸軍大臣の割腹自殺も、カメラの長回しでかなり生々しいものだったが、この映画はこれがメインであるだけに、そりゃすごいもの。さて、あなたはこの切腹シーンを観て、どのような「男の美学」を感じとることができるだろうか……？

2006(平成18)年4月3日記

### ミニコラム

## 8・15とあの戦争、そして愛国心

8月15日の終戦記念日は、日本人にとって特別な日。したがって、東宝は『日本のいちばん長い日』（67年）、『日本海大海戦』（69年）などをこの日に向けてつくっていた。しかし、近時の夏の風物詩は『釣りバカ』シリーズのみ。今夏は、「パイレーツ」がカリブ海で暴れ、「リトル・ギャング」が森を闊歩し、「スーパーマン」が空を飛び、きわめつけは「日本沈没」だったが、戦争映画は9月16日公開の『出口のない海』だけ。そこで今秋注目すべきは、クリント・イーストウッドが日米双方の視点から硫黄島の過酷な戦いを描く『父親たちの星条旗』と『硫黄

島からの手紙』。硫黄島防衛の指揮官栗林忠道中將は「万歳玉砕」を否定し、地下壕に籠もっての徹底抗戦を命じたため、米上陸軍も甚大な被害を受け、硫黄島は地獄絵と化した。小泉総理による8・15靖国参拝によって、遊就館の見学客がさらに増えるだろうが、あの戦争を考へそして愛国心を考えるにあたっては、何よりもまず覗いてみることに、触れてみることに、そして感じてみる必要がある。教科書どおりの議論を並べ立てるのではなく、あなた自身がこんな映画を観て、感じ、考えてみたいもの。

2006(平成18)年8月16日記